

トップジャーナルに 挑戦!

臨床医のための ジャーナルクラブ 完全ガイド

藤川達也

三豊総合病院 副院長

はじめに

医学論文を読み合うジャーナルクラブは、論文の内容を順番に紹介して終わるだけでは、少しもったいないと感じています。実際には、読んでいて引っかかったところや、よくわからなかった点を持ち寄って話す時間のほうが、面白く、学びも多いものです。自分ひとりでは気づかなかった見方を、他の人から教えてもらうことも少なくありません。

最近、論文を読む手助けになるツールも増えてきました。要点を素早くつかむには、とても便利だと思います。一方で、それを使うことで、考える前にわかった気になってしまうことがあるのも事実です。

この本を書こうと思ったのは、そうした道具を否定したかったからではありません。むしろ、うまく使いながら、その分浮いた時間を、もう一度「考えること」や「話し合うこと」に回せないか感じていたからです。何が気になるのか、どこが腑に落ちないのかを言葉にし、他の人の考えを聞く。その積み重ねが、結局はいちばん力になると考えています。

生成AIの力を少し借りることで、論文を読むハードルは確かに下がりました。ただ、それで議論まで終わるわけではありません。何が気になったのか、どこに違和感を覚えたのかを出し合い、考えを重ねていくことは、やはり人が集まってこそ生まれるものです。

この本では、生成AIを補助として使いながらも、最終的には私たち自身が考え、話し合いながらジャーナルクラブを進めていくことの大切さを意識して書いています。道具に任せきりにするのではなく、どう使うかを現場で考え続ける。そのための考え方を、日々の現場を思い浮かべながら整理しました。

2026年3月

藤川達也

ジャーナルクラブの運営

次にジャーナルクラブを立ち上げる時に考えることは何でしょうか？

■ ステップ1：ジャーナルクラブの目的を設定する

先の項ではジャーナルクラブの目的を列挙しましたが、実際にクラブを立ち上げるにあたりその目的は個々において異なるでしょう。さらにジャーナルクラブが研修医カリキュラムに組み込まれた場合、その目的は時間の経過とともに変わると考えられます。例えば、研修医1年目の場合、クラブの主な目的は、**プレゼンテーションやコミュニケーションのスキルを向上させることや生物統計や疫学の基本的知識を得ることなどでしょう**。その後、基本的スキルが身についたら、実践に基づいた学習と医学知識の最新情報を得ることが主な目的になるでしょう。基本的な論文の読み方を身につけた上級医たち、専門医たちのクラブにおいては、**最新の論文に触れて、とにかく情報をアップデートすることや、時に最新の知見に対する意見を述べ合うためのクラブ**となるはずで、目的を明確化して明示する必要までにはないにせよ、目的によってジャーナルクラブで使われる論文の種類や難易度が異なってくることもあり、ある程度の目的は共通認識として持つておくほうがよいでしょう。そこはリーダーや指導医が立ち上げる時や年度替わりにオリエンテーションで述べるのが望ましいと思います。ちなみに当院（三豊総合病院）では年度初めの最初のジャーナルクラブの時に、運営方法、論文の選択方法、プレゼンの様式、印刷物の準備などの説明をする際に目的も説明しています。



3

ジャーナルクラブを 続けさせるコツ

せっかくジャーナルクラブを立ち上げたものの、会が続かずにいつの間にか消滅してしまった経験はあるでしょうか？ 成功するジャーナルクラブとは、高い出席率、長期間続くこと、出席者の満足度が高いこと、などが一般的とされています³⁾。一方で、失敗するジャーナルクラブの原因としては、時間が無い、トピックへの関心が薄い、批判的評価のスキルが不足している、などが知られています³⁾。

1 ジャーナルクラブ継続での問題点と解決策

1. 参加者が2～3人しかないあまり緊張感のないジャーナルクラブ

解決策：もともと少人数の科であればジャーナルクラブの参加者が少ないのはやむを得ません。もちろんそれでうまく運営されていれば立派なことであり、続けていければ理想的です。しかし長続きしそうになれば**他科との合同でジャーナルクラブ**をしたり、**オンライン（Zoom など）を使って他院と共同で開催**する方法もあるでしょう。会議室に集まったメンバーと遠隔地にいるメンバーとでオンラインで結んで対面とオンラインのハイブリッドで開催することもできるかもしれません。

次に最初出席者は多かったにもかかわらず、次第に減ってきて、いつしか2～3人となり、会が消滅するパターン。会が科内の定期行事だったり研修医活動の一環で、一応出席が義務づけられているものであれば比較的出席率は保たれるはずですが、しかし任意の会であれば多忙の中、準備不足で延期することも許されるとなれば、なかなかモチベーションも維持できないものです。

その解決策として、ある程度の緊張感を保つために、1名でも**指導医に加わ**



1

レターとは？ 雑誌の目次で目にすることはあるけれど（これも立派な業績だ）

この2章ではレターについて述べたいと思います。ジャーナルクラブでは発表者がある論文を取り上げて説明し、自分の意見を述べます。それに対して参加者たちも自分たちの意見をぶつけます。そうした疑問を直接雑誌に、そして筆者に疑問点を投げかけるのがレターです。

医学雑誌には、総説、原著論文、症例報告、レターなど様々なカテゴリーがあります。そのなかで、この章で取り上げるレターとはどういうジャンルを意味するのでしょうか？

英語でレターと言えば手紙を意味しますが、医学雑誌におけるレターは主に編集長（Editor）に宛てた手紙のことを指します。典型的なレターの例を簡単にあげてみると、「先月号の〇〇という論文を読んだけど、この部分の研究手法は適切と言えないのではないのでしょうか？」というように、①疑義を問いかけるものです。

レターは他にも、②掲載された論文に同意を示すもの、③自らの仮説や医学的な問題点を記述したもの、④掲載された論文の追加説明をするもの（同じ筆者による）、⑤症例報告、症例集積などが掲載されることがありますが¹⁵⁾、我々一般読者が投稿するレターは主に①の疑義を問いかけるものであるため、本書でレターと言えば①を指すものとお考えください。

論文は雑誌に投稿されれば、数名、典型的には2～4名の査読者（reviewer）により査読が行われます。しかし論文のテーマと科学的な研究に精通した専門



3

どんな雑誌でも受け付けてくれる？ レター対象雑誌とその条件（最新の傾向と対策）

ではどの医学雑誌がレターを募集しているのでしょうか？ すべての雑誌がそのようなコーナーを持っているのでしょうか？ 有名ジャーナルを含めて、多くの医学雑誌はレターを受け付けています。有名ジャーナルであれば半数以上がレターコーナーを持っているのではないのでしょうか。ただ、**そのコーナーの名前は雑誌ごとに異なります。**

Letter to the editor, Correspondenceなどが一般的です。詳しくは投稿規定のセクション（これも Author center, Instruction for authors, Author instructions など雑誌により呼び名が異なる）の中にレターコーナーに該当するものがあるか調べてみてください。

なお、レターコーナーが実在していたとしても**各雑誌の毎号の目次をみて実際にレター投稿が盛んに行われているのかどうか確認するようにしてください。**2～3号に1回程度レターが掲載されているような雑誌もしくは毎号レターは掲載されているもののすべての論文に対するレターが掲載されているわけではないような雑誌は、掲載を狙う場合において比較的狙い目と言えます。毎号、それもすべての論文にレターが掲載されているような雑誌（例えばNEJM）は競争率が高いことが想定されます。逆にコーナーはあるはずなのにほとんどレターが掲載されていない場合はレターを投稿する人がほとんどいないか、編集部があまりレター掲載に積極的でないかのどちらかでしょう。後者の場合には採用されにくいことが考えられます。



8

さあ投稿だ (オンライン投稿の流れ)

レターはオンラインを通じて投稿されます。ここではNEJMに対するレター投稿を実際の手順でお示しします。

ちなみにショートケースレポート（クリニカルイメージ）も原著論文も同じような手順でオンライン投稿を進めていきます。必要なファイルや提出書類は投稿しようとする論文形態によって異なりますが、レターは必要書類も少なく、原稿ができていれば投稿は簡単に終わります。

もし近々レターを投稿してみたいと思っているのであれば、まず関心のある雑誌の投稿ページにログインできるように筆者としてのアカウントを作ってみてはどうでしょう。アカウントを作れば自動的にその雑誌から自動送信メールが届きアカウントが作成されたことが通知されます。最初の頃は、NEJMからメールが届いた、と密かに興奮したものでした。

ここからはアカウントを作成した後の実際の投稿の手順です。

まず、NEJMのトップページ (<https://www.nejm.org/>) の右のほうにある「AUTHOR CENTER」を開きます。

